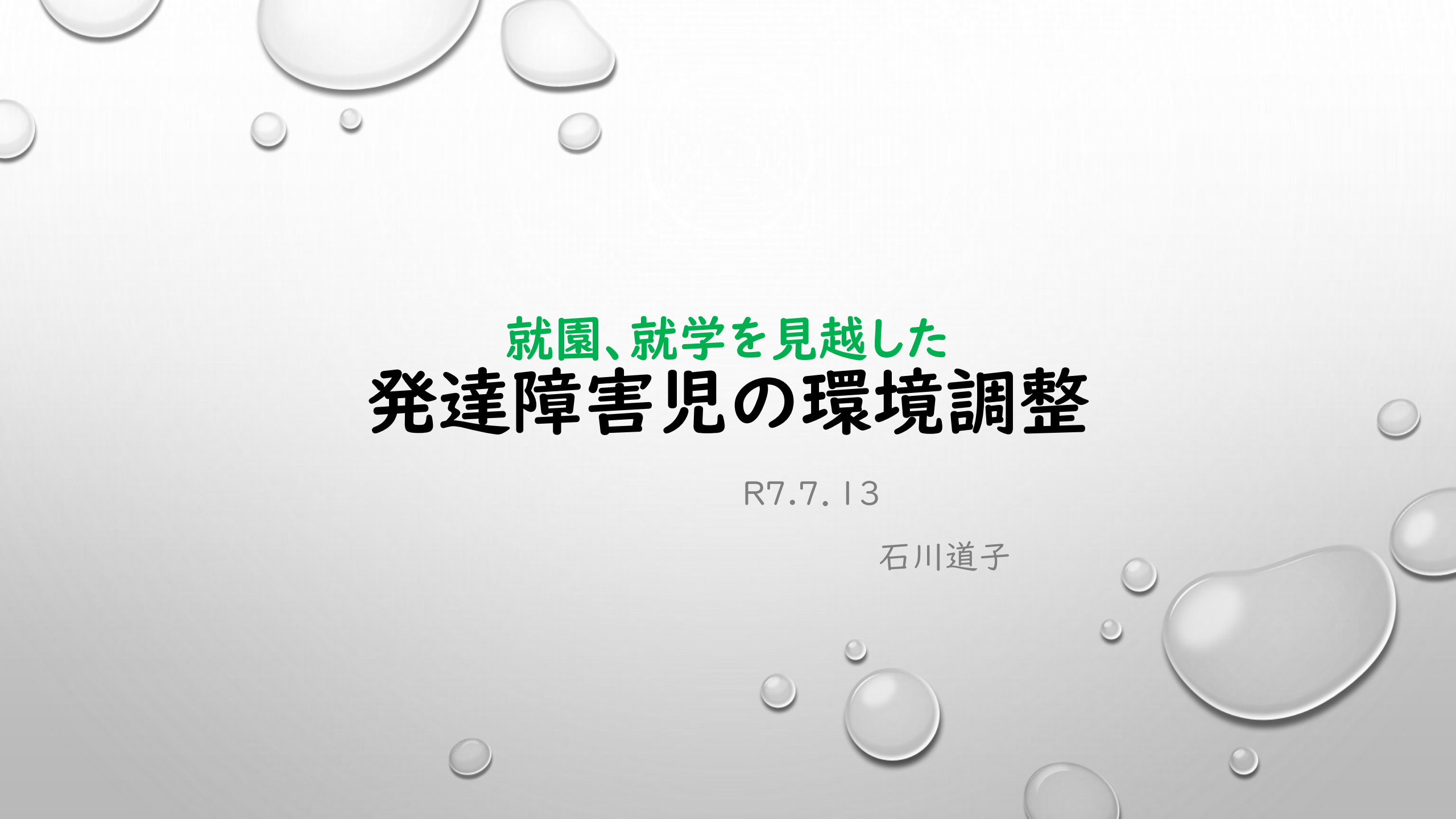




就園、就学を見越した 発達障害児の環境調整

R7.7.13

石川道子

今日の話

- 発達にサポートが必要ということは？
- 発達障害だとわかると何が起こるか
- 幼児期から学齢時の支援を考える

どんな場所で子どもと出会ってきたか

- 医療機関：大学病院（名市大）、総合病院（豊橋市民病院、海南病院、旭労災病院、大同病院など）
- 療育機関：名古屋市児童福祉センター、西部地域療育センター、西宮こども未来センター、
- 研究機関：愛知県コロニー、武庫川女子大学発達臨床心理大研究所
- アスぺ・エルデの会の活動、各種相談事業
- 学校・保育園等の巡回（名古屋市、小牧市、一宮市、岩倉市、武豊町、西宮市など）、事例検討
- 教育関係の相談事業（みよし市、名古屋市、神戸市）
- （ペアトレ, 保護者相談）

1) 発達にサポートが必要とは

「発達障害」の集団生活現場での現実的な適用

- 診断がついていない児がたくさん存在（みなし発達障害）。発達障害は合併していることが多く、診断名がついていても＋アルファの部分が存在。（診断を盲信しない）
- したがって、サポートする側が「発達障害」の共通項を知っていることが必要。同年齢の発達に比べて、①どこか発達が順調でない分野がある（同年齢集団で目立ちやすい）、②新規場面での適応行動の習得に時間がかかる、③環境の変化に適応しにくい、④未学習と誤学習が起こりやすいことなどを理解していることが重要。
- 確定診断は正しければ有用だが、「集団場面」の情報がない場合も多いので・・・。

マナーに気を配るにいい



独立のコミュニケーション



感覚が敏感で"氣"になる



金銭管理が苦手



自分の調子を抑えられない



人を頼りが苦手



いえ、 $|E|$ は $|G|$ の
半分です！

ニラ子といふ...

生活動作が苦々

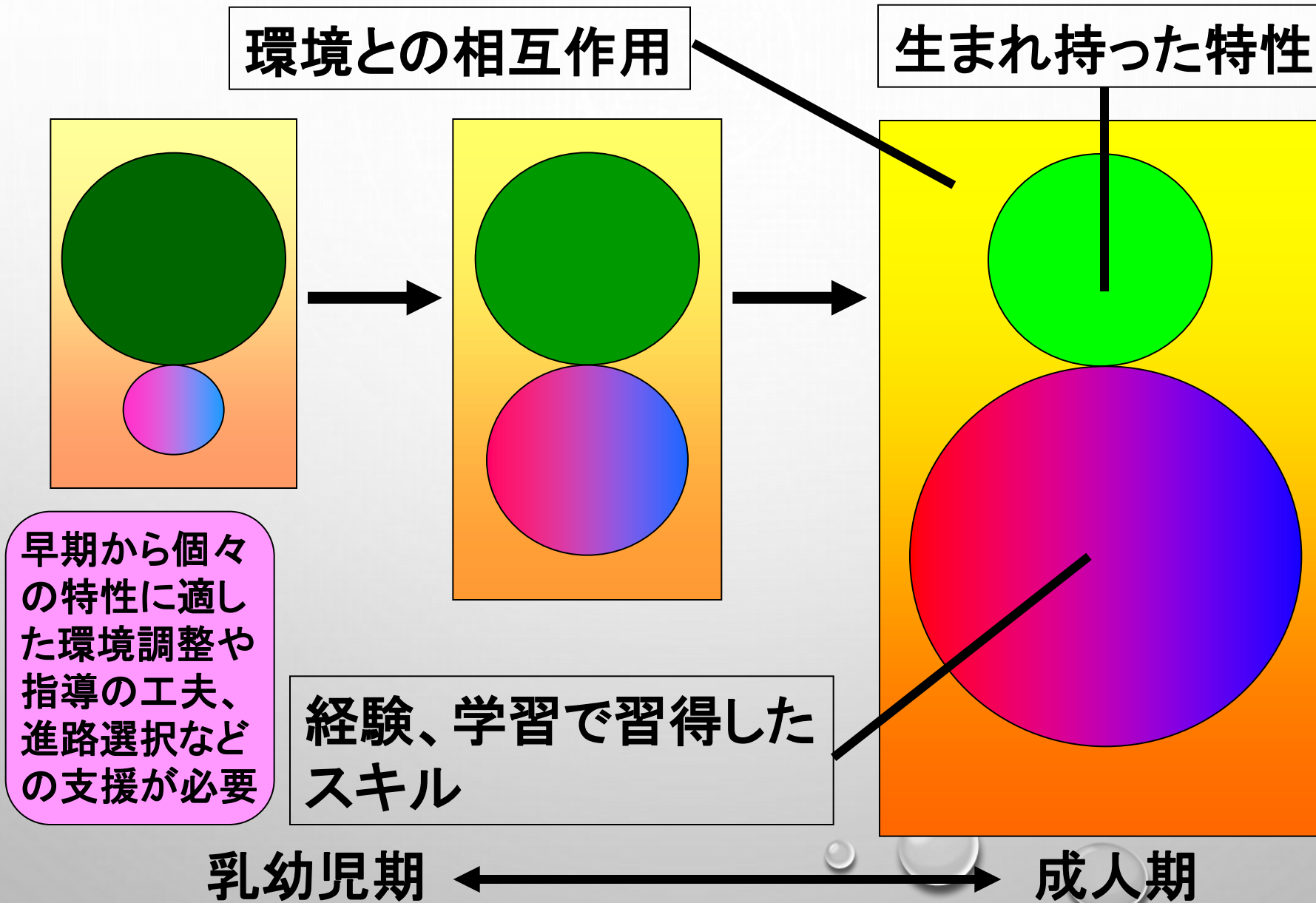


洗濯物が
Tシャツ等...



生活リズムが崩れやすい

<人の心理・発達・行動に影響を与える要因>



発達障害児の発達の違いは 乳児期から始まっている

- 粗大運動の微妙な遅れ
- 姿勢のコントロールが不十分
- 指の使い方(物の操作)の獲得が不十分
- 摂食行動が完成していない
- 感覚過敏の存在
- 経験が限られてくる
- 生理的モニターがにぶい

サポートが必要な子どもが示しやすい 乳児期の兆候

- 健診で発達が遅い（ことば、人とのかかわりなど）ことを指摘される
- 親が子育ての悩みをもつ、例えば食事、排せつ、睡眠、着替えなどの基本的生活習慣にかかわることがうまく進まない
- 興味を示すことがわからない、おもちゃで遊ぼうとしない、かかわり方がわからない
- 人見知りがないか、極端にありすぎる どちらも育児を手伝ってもらうのが難しい
- 一度泣き出すと止まらない、あやしても効果がない

特性は乳児期から存在する (症状ではない)

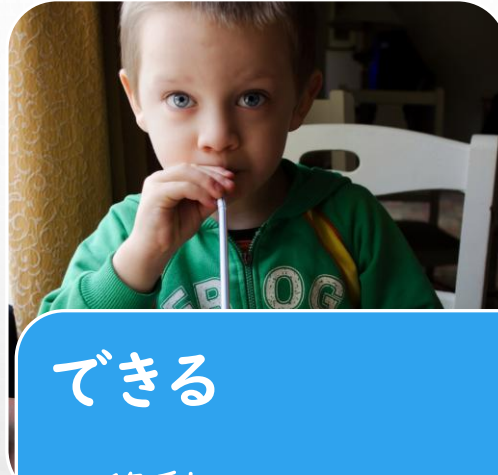
- 練習しないと獲得できない
- アンバランスさがあると複雑化するとき、問題になる
- 放置すると、未完成なまま
- 乳児期は受身なので、外からの働きかけが経験量を決める
- 苦手な刺激があるので楽しい経験ばかりではない

乳幼児期の発達をまとめると



生きる

- 食べる
- 寝る
- 排せつする



できる

- 移動
- 物を操作
- 自分で生活動作をする
- ことばを話す



楽しむ

- 遊ぶ
- 人とやり取り
- 変化させる

大人が助ける



発達が年齢相当でないとか問題になる行動がある 子どもを育てるときの乳幼児期の目標

- 1人でできることを増やす

発達レベルにあったことを練習する(育てる)

本人が身に着ける方法の工夫(ささえる)

家庭以外との協力(つなぐ)

本人の体験を演出

- 一緒に楽しむ
- 指示が聞ける、周囲と同じ行動をする
- 友達関係を広げる

支援の原則

- できることを増やす

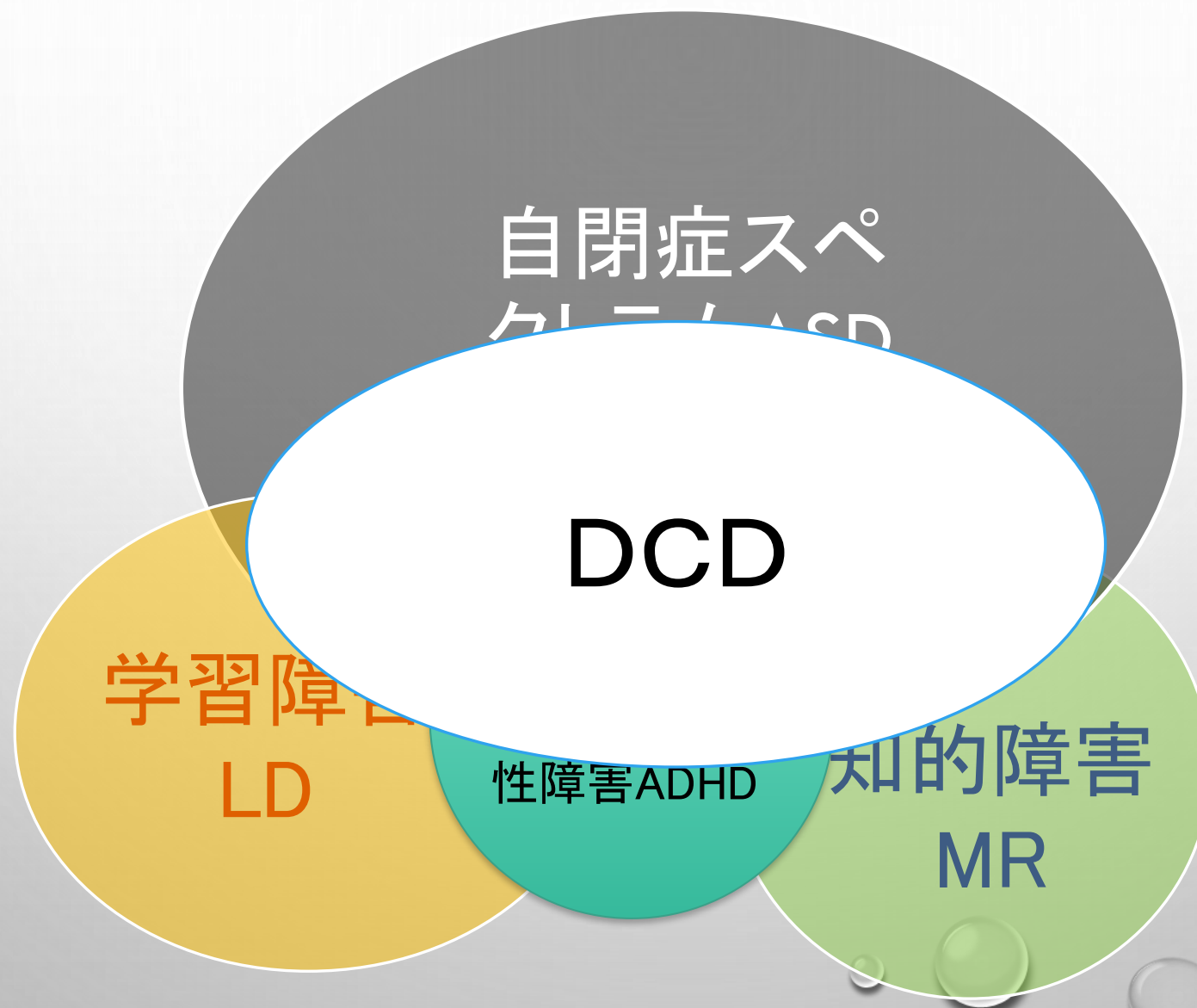
手伝って(一緒に)やってみる→できてうれしい、便利になった、ほめてもらえた体験→やることのメリットを理解→次もやろう

- 指示を聞いてみんなと同じことをする

指示された行動を理解→やるタイミングを人と合わせる(自発性だと合わせられない)→一緒にやってよかった体験→次もやろう

2) 発達障害とわかると

発達障がいの関係図



年齢や環境や体験で目立つ行動が違う

- ① 発達障がいとは、定型発達と違う発達の経路をとるタイプの子の総称
- ② 発達の凸凹を示しやすいが変化することも多い
- ③ 合併している例が多く、それぞれの障害の特徴が目立たない
- ④ 幼児期は、言葉の遅れや多動が目立つ⇒ADHD
- ⑤ 学齢期は学習の習得が出来ない⇒LD
- ⑥ 成人期は自立した社会参加が出来ていない⇒ASD

最も知られていない発達障害 DCD（発達性協調運動障害）について

- 年齢相当の協調運動（粗大運動AND/OR微細運動）ができない
- 練習しても出来ない（中核群のDCD）場合と練習すればできる場合があるが、両者とも初めてのことはうまく出来ない。
- 複雑な協調運動になるほど、苦手さが目立つ
- 対人関係やコミュニケーションにも大きく影響
- やれないことがはつきりするので、自己評価が低くなる

目立たないけど重要なDCD

- 書字障害、板書をうつすことが出来ない
- 着席の苦手さ
- 運動が複雑化したときに練習法が分からない、練習量が必要
- 日常生活動作の不完全さ
- 行動の不自然さ
- 片付けが出来ない、ものを落とす



DCDは動けるための練習を続けないと、
就労時に問題になる

自閉スペクトラム症の 情報処理（認知）の特性

1. 視覚優位（はなしことばが苦手）
2. 細かく、パーツに注目しがち
3. 2つ以上の情報処理が困難
4. パターンが決まった物事が理解しやすい
5. 記憶がいい
6. 感覚過敏性
7. パニック（情報入力 of 停止）を起こしやすい

たとえば、視覚優位があると

- 見えないものが分かりにくい

はなしことは、この先起こること（見通し）、相手の考えていること、
時間経過、自分の行動など

- 初めてのことが苦手、抵抗する

言葉だけだとイメージができないので不安になる⇒拒否

- 自分のみえるもので世界を理解しようとする
(視点の転換ができない)

サリーとアン課題の不通過



モデルを見せる方が説明するより有効

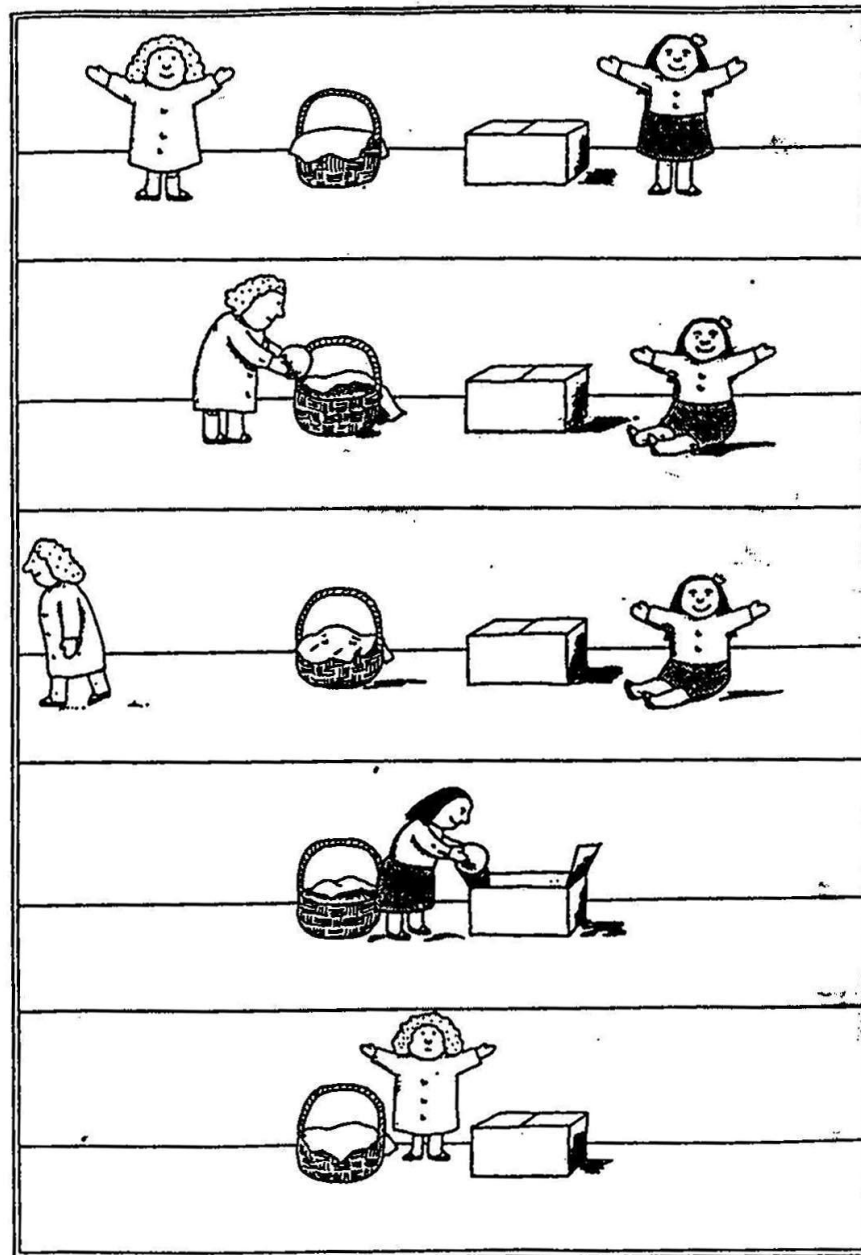


図 5.1 サリーとアン課題 (画家 Axel Scheffler の許可により Frith : 1989 a から転載)。

二つのことの同時処理が難しい

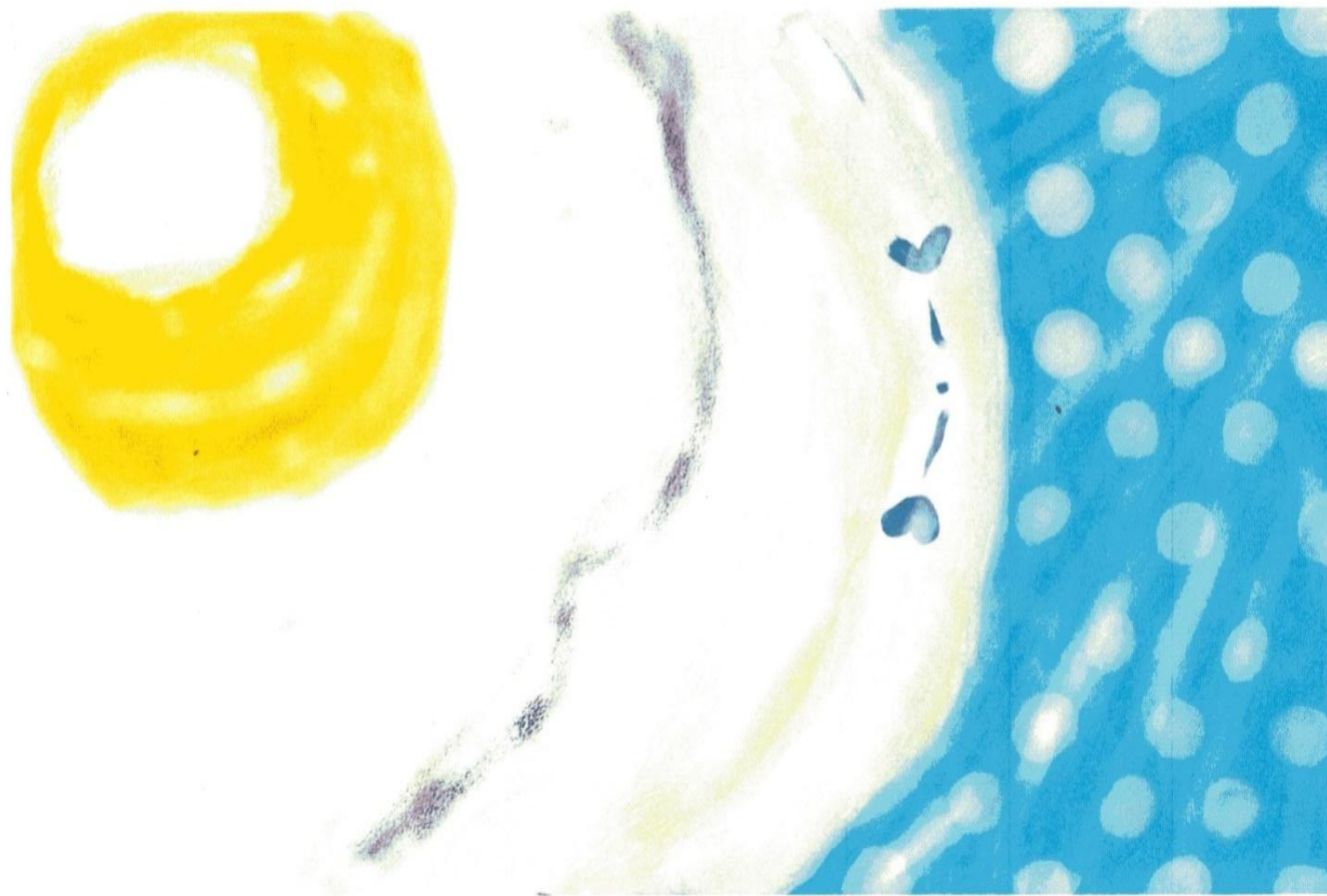
- 「〇〇しながら××する」は難しい

例: 顔を見ながら話を聞く、本を読んでいるときに質問に答える、動いているときに周りの様子を見る

- 視覚優位と組み合わせると、視覚的な刺激があると話が聞けてないことが多い
- いくつかの指示をすると不完全な実行になる

☆ 指示は具体的に、一つの動作が終わってから次の指示をする

これは何の絵でしょう？



パーツ・細部に注目する傾向がある

- ざっくり全体にという理解より、細部まで厳密に把握しないと落ち着かない
- 他の人は気が付かない細部の違いやゆがみが気になる
- ことばも文脈よりも単語に注目しがち
- 記憶の良さと重なると、気になることが多いが、人にはわかってもらえない（「そんな些細なこと、我慢しなさい」と言われる）

細部・パーツに着目することから派生すること

- 全体よりパーツに目がいきがち
- 人の情報処理が難しくなる
- 背景情報と処理しなくてはいけない情報(重要なこと)が分けにくい

★ 遠くに離れた方が人の行動の観察
がしやすい

年齢に関わらずこんなことが起こりがち（発達障害
あるある）→その対応策を考える（＝味方になる）

- ①新しい環境になった時に目立ちやすい
- ②同年齢での集団行動がうまくとれない
- ③ことばによる情報伝達がうまくいかない
- ④パニック時には適応行動がとれなくなる
- ⑤気持ちの切り替えが難しい

②集団からはずれる理由とその対処

- 一斉指示の聞きそこない⇒視覚補助
- 複数の人の中にいると「人がパーツで見えやすい」⇒集団から離れたところで観察させる
- 複数の人がいるとモデルにする人が決められない⇒先生をモデルに
- 初めてのことは不安が強く情報が取れない⇒一回目は観察

教室で先生の話聞くこと



③話しことばでの情報伝達が うまくいかない

- 一斉指示のききそこない
- 情報の一部分だけを記憶する
- ことばだけの情報は理解しにくい、忘れやすい、誤解しやすい
- 理解するまでに時間がかかる
- 表現の不適切さ

習得していくものも違ってくる

- 誤学習と未学習の問題
- 情報処理特性から習得しやすいものと習得されにくいものが出現。
- 【習得しやすいもの】

視覚的にとらえられる

同じパターンで繰り返す（状況や相手によって変わらない）

短い時間で理解できる

【習得しにくいもの】

人が関係してくること

長時間持続しなくてはいけない

強制されたが結局意味不明のもの

発達障害のグループの中でも出 会うことの多いASDとDCDの合併 がある子について 乳幼児期の育ちを整理してみる

ASD+DCDの場合の発達過程を理解する

☆乳児期、幼児期早期には、指示に従わない
場合には、粗大運動の発達、基本的生活動作
の定着の問題が存在することもある

3) 学齡期に起きやすい問題と その対応を考える

なぜ乳幼児期のサポートが必要か？

- 誤学習と未学習を防ぐことができる→周囲の大人が教えていく、やれること、練習の方法など工夫が必要
- 楽しいことを大人と一緒に経験する
- 失敗体験を最小限に→失敗を避けすぎない、おとなとの共感が育っていること、気持ちが切り替わる方法を複数持っていること

3～6歳の時期のサポート

- **頑張ってほしいこと**

- ①パニックの予防法と回復方法を教える
- ②SOSを出してよかったという経験を増やす
- ③「できた」ときの気持ちのよさを知る
- ④ひきつづき、とことん生活動作を練習する

- **がんばらなくてもよいこと（もっと先で練習できる）**

- ①無理に同世代の子どもただけで遊ばせなくてもよい
- ②園の独自のルールはふんわり流す

幼児期の集団生活で発達障害児が 習得しにくいこと

- みんなと遊ぶと楽しい、自分で独占するよりいいかも
- おなかがすいたので給食自体（メニューではない）が楽しみ
- お友達と仲良くしたいのでけんかを避けるかすぐに謝ることが必要だな
- 注意されたら、すぐにやめる
- 自分の体験や気持ちを相手がわかりやすいように表現する
- 周囲の雑音があっても先生の声聞き取る
- 次を予想して行動する
- 疲れたら休む、のどが乾いたらお茶を飲む（園のルールを守って）
- 待たせている人がいたら急ぐ、嫌な思いをさせたら謝る
- わからないときには先生やお友達に聞く（できればタイミングを見計らって）

就学前に総点検ができると適切な準備が可能に

- **専門機関への受診** 正しい診断名をもらう、知能テストなどの実施
- **就学相談** 市町村によってシステムが違う、特別支援教育の見学など
- **学校との情報共有** 保育要録、就学支援シートなど
- **就学後の生活を整える** 入学式対策、通学方法、下校後の利用場所など

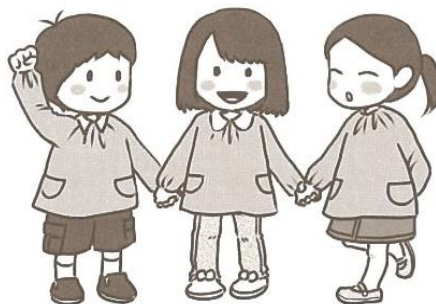
保育・指導要録のための発達評価シート

TASP

Transitional Assessment Sheet for Preschoolers

記録用紙

正しく記録し、支援につなげるために



保育・指導要録のための発達評価シート開発チーム

監修者 辻井 正次

TASPの特徴

- 3歳(年少)から5歳(年長)までの保育園・幼稚園での集団生活の中での行動を「先生」が観察して評価するシート
- 年長までに大多数の子どもができる行動として35項目があげてある。7領域に分かれているが、この後一部を紹介する。
- 集団生活で目撃される行動のうち、支援の必要な状態かどうかを判断する資料として、また就学時に学校と情報共有する資料として有用であるとされている。
- そのままの目的ではないが、このシートを記入することで保育者の観察よび支援の視点を身に着けることが出来るため、保育所における支援が向上する結果となる
- 各領域の点数をグラフ化し、偏りの有無を確認。また、4つの指標得点(外在化、内在化、学業、総合)で将来、学童期、思春期にどのような問題につながる可能性があるかを予測する

いわゆる発達の程度をチェックする領域

- **コミュニケーション** 5項目：名前を呼べば振り向く、ことばの遅れはない、過去にもなかった、オウム返しの応答がない、正しい発音で話す、ひらがなで書かれた自分の名前が読める
- **微細運動** 4項目：はさみを上手に使う（線に沿って形を切り抜く）、字を書ける、自分の名前が書ける、経験したことを絵に表す
- **粗大運動** 3項目：動きがスムーズである、けんけんをして跳ぶ（どんな状況でも安定して跳べる）、スキップができる（どんな状況でも安定して一人でスキップができる）
- 注意指標力、コミュニケーション、微細運動を合計した点数を**学業**とし、就学後の学業不振に陥る可能性を示す。

社会性と順応性

- **社会性** 6項目 : 年齢相当のふるまいができる、年齢相当の友達関係がある、同世代の子どもたちの中に入ることができるなどの集団の中での目立つ行動と、他児の動きを見て行動がとれる、「かして」「ちょうだい」のやりとりや友達と一緒に同じ遊びができるなどの社会的行動ができているかどうかの項目からなっている
- **順応性** 5項目 : 自分の気持ちを言葉で伝える、場所や物へのこだわりがないのほかは、初めての取り組みをするのにあまり時間がかからない、普段通りの状況や手順が急に変わっても混乱しない、新しい場面、状況にすぐ慣れるという新規場面への適応項目からなる。
- コミュニケーションと粗大運動の得点と社会性と順応性を合わせて、**内在化指標得点**となる。内在化とは本人を困らせる情緒・行動の問題が起こる可能性を示す。

落ち着きと不注意

- **落ち着き** 6項目： 静かに休息する、大きな声を出さない、場面にふさわしくないことを言わない、他の子に手を出さない、思い通りにならなくても我慢できる、周囲に配慮せず、自分中心の行動をすることはない
- **注意力** 6項目：整理整頓ができる、忘れ物やなくしものが少ない、人の話を注意して聞くことが出来る、集団で全体指示を聞き取る、指示を何回か言わなくても理解できる、集中でき、注意がそれない
- この二つの領域の点数の合計が**外在化指標**となる。この合計点数が低いと、周囲を困らせる情緒・行動の問題が表れやすい。特に、多動・衝動性や不注意傾向のために大人の厳しい叱責や体罰を受けやすいことにより、二次的な問題を引き起こす。

結果の利用方法

- 判定表 年少から年長まで、4～6, 7～9, 10～12, 1～3月生まれのそれぞれの領域と4指標得点の標準的水準、境界水準、要配慮水準が明記されている。結果を判定表と照らし合わせることで、同年齢のなかでのどの程度の位置にいるかが推測できる。
- 年少よりも年長の方が要配慮水準を示す場合に、発達障害特性が関連している可能性が高くなるが、発達障害の診断のためのテストではない
- 多動と不注意はADHDの症状、社会性と順応性とコミュニケーションはASDの特徴を微細運動と粗大運動はDCDの存在を示唆するが、大まかな指標である。
- 次年度への引き継ぎ、就学への橋渡しに有効である。本人のアセスメントと同時に支援方法の引継ぎも不可欠である。外在化、内在化指標が懸念される例は、その後の様子が聴取できるようなネットワークが必要である。

医療は基本的には「個」を診る

- 診察は個別で実施
- 情報は本人より保護者からの聴取
- 情報の正確度は保護者によって違うが、園・学校と対立していない方が集団生活での様子を正確に知っている
- 発達テストや知能テストなどは構造化された個別場面で実施
- 長時間持続するかどうかとか安定性があるかなどは把握できない
- 予測するスキルも専門性の一つ

①新しい環境になったとき目立つ

- 環境の変化は発達レベルではなく、年齢で決められている
- 発達障害と診断される子供たちの共通点の一つは、環境へ適応する力の弱さがある
- 適応するまでに通常より時間がかかる
- 今まで習得したことに固執しやすい（新しいことを抵抗する）

就学後に要求されること

- 着席時間 最低45分は座ること
- 時間割 授業、放課、給食とみんなと一緒に動くこと
- 連絡帳を書く
- 指示に従う 課題を拒否しない、注意したら辞める
- 宿題をやってくる、
- 授業内容を理解すること、ノートに書く
- 道具の管理 道具箱を自分の机の中に入れ、管理する
- 忘れ物をしない
- 空間 特別教室、運動場など広い
- 周囲の人間 初めて見る人がたくさんいる
- 先生が見ていない時間帯がある

通常学級で快適に生活できるように必要なスキル

- 字や数字が読める
- 字や数字が書ける
- 45分着席できる
- 指示に従う(しばらく黙っている、止まっているを含む)
- 曜日や時間が分かる
- 道具が片づけられる
- 排泄や着替えや食事が一人でできる
- 友達のやることを見ている
- 一番にならなくても怒らない
- 順番を守る
- 一人で歩いて登校できる
- 間違いを指摘されてもパニックにならない
-

まとめ

就学（環境が変わる）時に何が起こるか？

- 以前のスキルをかたくなに使おうとする
- 指示がきけないと誤学習が多くなる
- 学校が特性を把握していないと逆効果の対応となる
- 混乱すると学習する力が阻害される
- 学習の基礎を身に付けそこなう
- 学校が嫌いな場所になる
- 周囲の評価が低くなり、成長すると自己評価が低くなる

ライフサイクルに存在する“切れ目”

- 幼稚園・保育園に就園（初めての集団生活）
- 就学（小学校入学）
- 小学校から中学校に進学
- 中学校から高等教育へ
- 就労
- 一人暮らし
- 結婚・子育て



この時期には、手厚い支援と連続性を必要とする

集団の中での習得目標

一般的な目標

幼児期

- 母子分離
- 集団行動・遊びを通じた同年代との交流

小学校

- 基礎的な読み書き計算の習得
- 学校での集団生活での年齢相当の社会性の獲得

中学校

- 自分で判断していく
- 仲間と協力して問題を解決

発達障害児の目標

幼児期

- 決められた集団への安定した参加
- 先生との信頼関係

小学校

- ルールや先生の指示に従う
- 周囲を観察できる

中学校

- 集団で目立たない
- 家族以外の人に相談できる

学校から気持ちが遠ざかる

集団から離れるの
で連れ戻される

すきを見て離れる

集団で動くように先生に注意
される

集団から離れなくな
るが、一緒のことは
やっていないので注
意される(同級生か
らも注意される)

自己評価が低
くなり、集団参
加への負担が
高まる

不登校

学校生活を送る上で不利になる条件

- 長時間の座位保持が苦手
- 書字障害が存在する
- 運動が得意ではない
- 全体指示を聞き損なう
- 衝動的な動きでミスが多い
- 行動のテンポが遅れる
- 偏食がある場合は、給食が苦痛
- 集団の中での地位が低い

通常学級の学習カリキュラムはASDをLDに育てる

- 通常学級のプログラムはASD用ではない
- 速度が合っていない
- 習得できなかった場合に補習はない
- 興味のある教材が少ない
- これで終わりが分かりにくく、新しいことが次々出てくる
- 複雑すぎる（複数の目的、手順）

義務教育は発達障害児の 未来を分ける

- 学校生活に参加していることで学ぶことは多い
- 誤学習を防ぐための工夫
- 長期にわたる不登校は、社会性だけではなく、身体機能を損なう（睡眠障害、生活習慣病、腰痛などの二次障害）可能性が高い
- 社会参加しやすい環境の用意

発達障害児・者への支援は・・・

- 丁寧に、長期にわたり、あきらめず続ける
- 複数で役割分担する（例：専門VS日常的なかかわり、家族VS他人、大人VS同世代など）
- 働きかけが効果をしめすまでに時間がかかる
- 新しい環境になると問題が起きやすい
- 自分の価値観の見直しを迫られる



連携、チームで協働が必要となる

④パニックになるとうまく行動できない

- パニックなのに、周囲も自分も認識できていないことが多い⇒パニックの対応を
- パニック時はいつもの理解や実行能力が出来なくなっている⇒パニック時は何かを教えることを断念する
- 周囲の状況を入力できなくなっている、被害的な受け取り方をする⇒一人で落ち着ける場所を確保

パニックになりやすい場面

- 状況がよく分からず、混乱

例：人が大勢動いている（教室移動、自由時間、給食の準備、帰りの会、外遊びなど）、グループ活動、予定が急に変更、いつもと違った活動（誕生日会、運動会、行事など）

- 長時間頑張って疲労に負ける

例：着席、不得意な課題（書くこと、聞くことなど）を続ける、苦手な人と一緒にいる、叱責など

- 生理的に不快な状態が続く

例：暑さ、空腹、乾き、騒音、眠いなど

- 要求されている課題が出来ない

例：学習課題、宿題、友達と仲良くするなど

混乱した（パニック）時に周囲が 落ちついて対処すること

- 社会的なスキルを身に着けていても、パニック時の行動は変化しない。
- パニック状態を目撃する人は少ない方がよい。対応するのは慣れている人。
- その場で説得をしようと思わないで、パニックの収まった後に提案する。提案を検討する時間が必要。

練習するのに最も適している場所は家庭！

家庭では教えることができないあるいは集団の中での対応を教える場合は学校

<https://www.instagram.com/hattatsu.hoiku.gakkou/>



[HTTPS://WWW.INSTAGRAM.COM/HATTATSU.HOIKU.GAKKO](https://www.instagram.com/hattatsu.hoiku.gakko)
[U/](#)

限られた時間の講演では話せない「発達障害あるある」をINSTAGRAMで配信しています。興味のある方は、QRコードかまたは下のサイトから。

MORE!発達凸凹保育

発達凸凹キッズがぐんと成長する園
生活でのGood!なサポート

2023年10月中央法規出版より発売!

Amazonで予約

